

グレース・チャーチの三人
—新島とデフォレスト夫妻

奨励	森 孝一【もり・こういち】
奨励者紹介	神戸女学院 理事長・院長 同志社大学名誉教授

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれません。ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。

(ヘブライ人への手紙 11章13—16節)

ご紹介にありましたように、私は2010年に同志社大学を退職し、神戸女学院に移りました。神戸女学院に身を置くことによって、同志社にいる間は気づかなかった両校の関係が、いろいろと分かってきました。

両校は同じ会衆派の海外宣教団体「アメリカン・ボード」によって設立されました。両校とも、今年創立140周年を迎えています。創立は神戸女学院が1875年10月12日、同志社は同年11月29日です。

神戸女学院は、神戸の異人館街の一角、山本通に最初のキャンパスを購入しました。土地区分では、同志社は内地、神戸女学院は雑居地でしたが、どちらも外国人による土地購入は許されていませんでした。神戸女学院の最初のキャンパス購入の名義人は新島です。

神戸女学院の前身である寄宿学校は、最初、「女学校」という名前でした。読み方は「じょがっこう」だったのか、「にょがっこう」だったのか、「おんながっこう」だったのか、今では分かりません。最初校名が「女学校」となったのは、来日したアメリカン・ボードの宣教師たちが、同志社をBoys' School、神戸女学院をGirls' Schoolと呼び、ボストンの本部への報告にも、この呼び方を使っていたからだと思われます。

神戸女学院の創立者の一人、イライザ・タルカットはのちに、同志社の京都看病婦学校においても教鞭を執っています(1890~1896年)。

一昨年放映されたNHK大河ドラマ「八重の桜」に、山本覚馬の三女、久栄が登場しました。徳富健次郎(徳富蘆花)との恋に破れ、失意にあった時、父、覚馬は「神戸の英和女学校に行け」と勧めました。校名が「神戸女学院」となる前の名称です。

放映の翌日、卒業生名簿で調べると、1888年同志社女学校卒業。神戸の英和女学校に進学し、1891年卒業(第8回卒業生)とありました。残念なことですが、久栄は卒業の2年後の1893年に、23歳の若さで召天しています。

設立当時は、このように、両校は助け合っていたことがうかがわれます。

新島とデフォレスト夫妻

今日は同志社と神戸女学院の深い関係を表す、もう一つのエピソードについて、「グレース・チャーチの三人—新島とデフォレスト夫妻」と題して、お話ししたいと思います。

ヴァーモント州ラットランドのグレース・チャーチ。この教会は同志社関係者にとっては「聖地」です。現在、同志社創立140周年を記念して、同志社社史資料センターの展示「始まりの地—ラットランドから寺町丸太町、今出川へ—」が、今出川のハリス理化学館同志社ギャラリーで開催されています。

1874年10月6日に、アメリカン・ボード第65回年会が、このヴァーモント州ラットランドのグレース・チャーチで開催されました。アメリカン・ボードは会衆派教会(日本では日本組合教会)の海外宣教組織で、その総会にあたるのが年会です。

通常は宣教師となる決意表明を行うところなのですが、新島は非常な決意をもって、用意した異例の演説を行います。それは日本にキリスト教に基づいた大学を設立したい。そのための献金をお願いするというものでした。

「私は1000ドルをささげる」、「私は500ドル」と次々に声が上がリ、あとで追加されたものも含めて、総額は5000ドルに上りました。これが同志社設立の核となりました。5000ドルの中には、帰りの汽車賃をささげた農夫からの献金2ドルも含まれていました。

あまり知られていませんが、新島が大学設立を訴えたグレース・チャーチでのアメリカン・ボードの年会に、日本への伝道を志す、一組のアメリカ人夫婦も出席していました。のちに神戸女学院第5代院長となるシャーロット・デフォレストの両親です。

父親であるジョン・デフォレストと母エリザベスが結婚したのは、グレース・チャーチでのアメリカン・ボード年会の2週間前のことでした。

年会の25日後の10月31日、新島とデフォレスト夫妻は同じ船でサンフランシスコを出発し、約1カ月の航海の後、11月26日に横浜に到着します。

デフォレスト夫妻は新島と共に、大阪の川口居留地で、アメリカン・ボードの宣教師たちと一緒に暮らしました。

同志社英学校が設立されてから11年後の1886年、父ジョン・デフォレストは新島に乞われて、「第二の同志社」ともいうべき「東華学校」を東北に設立するために、家族と共に仙台に移り住みます。しかし、東華学校は1892年に廃校となります。

1890年に新島が召天したことで、国家主義的風潮が強くなり、キリスト教に対する社会的抑圧のために、学校を維持するための募金が集まりにくくなったことが廃校の原因であったと言われています。

ジョン・デフォレストは仙台赴任2年後の、1887年には日本組合教会宮城教会(現在の日本基督教団仙台北教会)の設立にかかわり、1年間、仮牧師を務めました。彼は1911年に亡くなるまで、25年間仙台での宣教に従事します。

第5代デフォレスト院長

次女のシャーロット・デフォレスト(Charlotte Burgis DeForest)は、1915年から1940年まで25年間、神戸女学院第5代院長を務めました。

その間、1933年には、キャンパスの岡田山移転を実現しています。キャンパスの設計をウィリアム・メレル・ヴォーリズに依頼しました。

彼の設計による12棟が、昨年初、国の重要文化財に指定されました。名称は「重要文化財 神戸女学院」です。

シャーロット・デフォレストは、両親であるデフォレスト夫妻が来日して5年後の、1879年2月23日、大阪の居留地で誕生します。誕生から3カ月後の5月11日に日本組合教会大阪教会で、シャーロットは新島から幼児洗礼を授けられています。

三人姉妹の一人、妹のルイズは、現在の同志社女子大学の前身であった同志社女子部で教鞭をとりました。

新島の東華学校設立を実現するために、父ジョン・デフォレストが仙台に赴いたため、娘のシャーロットは7歳からボストンの高校に入学する15歳までの8年間、仙台で少女時代を過ごしました。デフォレスト先生のお墓は、両親のお墓と共に、今も仙台にあるお寺の墓地にあります。

デフォレスト先生はボストンの高校を卒業後、マサチューセッツ州ノースサンプトンにあるスミス・カレッジに入学しました。スミス・カレッジは現在もアメリカを代表する女子リベラルアーツ・カレッジであり、父ブッシュ大統領夫人のバーバラもここを卒業しています。

デフォレスト先生は1901年にスミス・カレッジを卒業し、2年後の1903年、24歳の時に、両親と同様にアメリカン・ボードの宣教師となり、9年ぶりの日本に着任します。

その時の様子をのちに振り返って、次のように記しています。

「横浜の港に近づく、朝日に輝く雪をかぶった富士山の頂上が遠く見えて、いうにいわれない感動をいたしました。やはり縁のある日本へ『帰る』(『』は筆者)と心が落ち着きました」(「わが心の自叙伝 シ、ビ、デフォレスト」『神戸新聞』昭和42年4月20日)。

デフォレスト先生にとっては、やはり日本に「帰る」という表現が、自然であったのだと思います。

二つの祖国

デフォレスト先生の1940年のアメリカへの帰国は、太平洋戦争の勃発が間近に迫っていたためでした。

デフォレスト先生はアメリカに帰国した後、1944年6月、カリフォルニア州マンザナーの日系人強制収容所のカウンセラーとなり、強制収容所が閉鎖された1945年11月まで、収容されていた日系人のために働かれました。

日系人強制収容所は日系人によるスパイ活動を防止するためという名目で、1942年、ルーズベルト大統領が発令した「大統領令9066号」によって設置されました。

マンザナーはカリフォルニア州とはいえ、シエラネバダ山脈を越えた内陸部にあります。現在は歴史的記念施設として、さまざまな施設ができ、見学者を迎えていると聞いていますが、私が訪れた1970年代半ばの当地は、何も無い、砂漠に近い荒地でした。そのマンザナーに約1万人の日系人を収容するための「バラック」が建てられました。全米では約12万人の日系アメリカ人が強制収容所に収容されました。

デフォレスト先生はマンザナー強制収容所で働く前年まで、ロサンゼルス近郊のクレアモントにあるボモナ・カレッジでアメリカ陸軍兵士のために日本語を教えました。

山崎豊子は小説『二つの祖国』で、マンザナー強制収容所に収容され、「二つの祖国」の間で揺れ動いた、ロサンゼルス日本語新聞社の記者、天羽賢治の姿を描いています。ポモナ・カレッジでアメリカの陸軍兵士に日本語を教えた翌年に、日系人が収容されているマンザナー強制収容所で、日系人のために働くことを決意されたことは、デフォレスト先生の心もまた、「二つの祖国」の間で激しく揺れ動いていたことを物語っています。

両校創立者の「志」

最後に、「新島と神戸女学院の初期の宣教師たちに共通するもの」について、考えてみたいと思います。

新島を含む、アメリカン・ボードの宣教師たちは、身の危険を冒してまで、日本における宣教を志しました。新島の場合は、函館からの「脱国」（不法出国）。神戸女学院の創立者である、タルカット、ダッドレーの二人の婦人宣教師がアメリカを出発したのは、1873年。キリシタン禁制が解かれるというニュースが届く前のことでした。

身の危険を覚悟で、新島をアメリカへ、そして、神戸女学院の二人の創立者を日本へと押し出したものは、何であつたのでしょうか。

一つは、日本におけるキリスト教の伝道でした。しかし、彼らは教会だけではなく、学校を設立しました。すなわち、開国間もない日本において、近代化を担う若者の育成を目指したのだと思います。

両校の設立から十数年、1890年頃までに当時の明治政府は、富国強兵・殖産興業による近代化に舵を切ります。そのような社会・政治状況のなかで、富国強兵だけでは、本当の日本の近代化は実現しないと主張したのが、新島であり、神戸女学院の初期の宣教師たちでありました。

新島は「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年 245頁）と訴え、神戸女学院の創立者の一人であつたタルカットは「背筋を伸ばしなさい」（横川四十八「偉人タルカット女史」再録『学院史料』第五号 1987年3月 9頁、29頁）と教えました。

自らの良心に従い、主体的に、背筋を伸ばして、日本を担っていくことのできる人材を養成すること。これが同志社と神戸女学院の創立者たちの志でした。

今日の聖句、ヘブライ人への手紙11章には、アベルからアブラハムに至る、旧約聖書の信仰者たちの名前が列挙されています。それに続いて、

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです」（13節）

と記されています。

新島も、タルカットも、ダッドレーも、同志社、あるいは神戸女学院の完成という、神さまによって「約束されたもの」を見ることはできませんでした。

新島は同志社大学設立の旨意で、「我が大学設立のごときは、実に一國百年の大計よりして止むべからざる事業なり」と語っています（同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波書店 2010年 32頁）。また生前、新島は勝海舟に「大学の完成には200年」（300年という説もある）と答えています。

創立140周年を迎えている今年、もう一度、新島の同志社設立の志を確認し、神さまによって「約束されたもの」の実現に向けて、ともに努力したいと願っています。

2015年6月3日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録